

第46回

青森県少年の主張大会報告書

青い雲



主催：青少年育成青森県民会議 国立青少年教育振興機構

目 次

■ 第46回「青森県少年の主張大会」概要	P 2
■ 主催者挨拶	P 3
■ 来賓祝辞	P 4
■ 発表	P 5 ～ P12
■ 講評（要旨）	P13
■ 第46回「青森県少年の主張大会」実施要綱	P15
■ 講演（要旨）	P16
■ 紹介	
第46回少年の主張全国大会～わたしの主張2024～	P20
・ 内閣総理大臣賞作品	
・ 文部科学大臣賞作品	
・ 国立青少年教育振興機構理事長賞作品	
・ 審査委員会委員長賞作品	
・ 審査委員会委員長賞作品	
第46回少年の主張全国大会～わたしの主張2024～開催要綱	P25

第46回「青森県少年の主張大会」概要

■次 第

1 開 会

主催者挨拶	青少年育成青森県民会議会長	橋本 都
来賓祝辞	三沢市長	小檜山吉紀
	上北教育事務所長	佐藤 真理

2 発 表

正解の無い世界へ	むつ市立田名部中学校	2年	二本柳凜子
とても身近なもの	青森市立南中学校	3年	中村 有希
「大丈夫だよ！」	青森明の星中学校	3年	神田杏花里
ひと助けの一步を	青森県立三本木高等学校附属中学校	3年	竹達 夏波
「戦艦大和」から考える	三沢市立第一中学校	3年	萩野 一步
言葉の宝箱	風間浦村立風間浦中学校	3年	中島 優月
心の通い合う時間	階上町立道仏中学校	2年	濱谷 舞香
外から自分を見つめて	風間浦村立風間浦中学校	1年	林 大聖

3 講 演

「世界から見た日本の魅力と起業のすすめ」

講師 材株式会社 代表取締役 浄法寺朝生 氏

4 表 彰

最優秀賞1名、優秀賞2名、優良賞5名

5 講 評

青少年育成青森県民会議 青少年専門指導員 坂本 徹

6 閉 会

■審査員

青森県中学校長会	常任理事	太田 浩之
青森県PTA連合会	会長	横岡千和子
青森県こども家庭部県民活躍推進課	課長	沼田 弘一
青森県教育庁学校教育課	指導主事	山本 泰久
青少年育成青森県民会議	青少年専門指導員	坂本 徹

主催者挨拶

青少年育成青森県民会議
会長 橋本 都



皆さん、こんにちは。

第46回青森県少年の主張大会の開催に当たり、一言御挨拶申し上げます。

本日は上北教育事務所長様に御臨席いただき、まことにありがとうございます。

この大会は、昭和54年の「国際児童年」を記念して始められ、これまで県内各地で数多くの中学生が参加し、様々なことを主張してきました。

少子高齢化や国際化、情報化が急速に進み、環境が目まぐるしく変化する現代社会において、次代を担う子どもたちには、心身ともに健康で、他者を思いやる心を持ち、社会的に自立していける、健やかな成長が求められています。

この大会が、広い視野と柔軟な発想や創造性などと共に、物事を論理的に考える力や、自らの主張を正しく伝え、理解してもらう力などを身に付ける契機となることを願っています。

本日は、原稿審査で選ばれた8人の中学生の皆さんが、様々なテーマで発表してくださいます。皆さんがどんなことを考え、どんな意見を聴かせてくれるのだろうと大変楽しみにしています。

また、大会に参加して下さっている三沢市立第一中学校の生徒の皆さんも、発表を聴きながら、「自分ならどう考えるだろう」「自分ならどういう行動が取れるだろう」と自分自身に問いかけながら、様々なことを考える機会にしていいただければ、とてもうれしく思います。

発表の後には、材（ざい）株式会社の代表取締役であり、三沢市と三沢市教育委員会が開催している「ゆめチャレ教室」の講師として青少年健全育成に関わって下さっている浄法寺（じょうぼうじ）朝生（あさお）さんに「世界から見た日本の魅力と起業のすすめ」と題して、御講演をいただきます。

浄法寺様には、御多用の中、お時間をつくっていただき、心から感謝いたします。

中学生の皆さんは、小学生の時とは違い、学習内容や活動範囲が広がり、広く地域のことについて学び、スポーツや課外活動に打ち込んでいることと思います。

この数年間、新型コロナウイルス感染症の影響を受けた生活の中で、命や社会のこと、家族や友達のすることについて様々な考えた人が多いことでしょう。

中学生としての3年間は、多様な人々との関わり、つながりの中で自分を形づくり、心身ともに大きく成長する、人生の中でもかけがえのない時期です。同年代の代表生徒の発表を聞き、自分なりに考えることで、今日の主張大会が皆さんの成長のきっかけになることを期待しています。

結びに、協力校として、様々な準備をして下さった三沢市立第一中学校の見友（みとも）校長先生、そして教職員の皆様に感謝を申し上げ、挨拶いたします。

來賓祝辭



三沢市長 小檜山吉紀

第46回「青森県少年の主張大会」が、このように盛大に開催されますことを心よりお喜び申し上げます。また、長年にわたり、本大会の開催と青少年の育成に御尽力されている青少年育成青森県民会議の皆様に対し、深く感謝と敬意を表します。

本大会は、中学生が日常生活で感じていることや考えていることを発表することにより、次世代を担う青少年としての自覚と自主性を育てることを目的に開催されているものと伺っております。これからの時代は、絶え間ない技術革新や人工知能の飛躍的な進化により、予測することが困難です。しかし、そんな時代だからこそ、目的を考えたり、目的のよさ・正しさ・美しさを判断できたりする人間本来の強みが求められます。未来を担う中学生が自分の考えを発表することは、大変意義あることだと思います。

本日出場する中学生の皆さんは、この日の発表に向け多くの時間を費やしてきたことだと思います。未来への希望や提案、家族や友達との関わりの中で感じた思い、社会の様々な出来事に対する意見などを、自分の言葉で思う存分主張していただきたいと思います。皆さんの主張が、同世代の仲間や社会に新たな思いを生み出されることを期待しております。

また、会場校である三沢市立第一中学校の生徒の皆さんは、同じ中学生の仲間が、どんな考えや思いをもっているのか、自分の思いと比較し考えを深めていただきたいと思います。

結びに、県内全ての青少年の健やかなる未来と、本大会の成功を御祈念申し上げ、お祝いの言葉といたします。



上北教育事務所長 佐藤 真理

來賓祝辭

第46回「青森県少年の主張大会」が、このように盛大に開催されますことを心からお喜び申し上げますとともに、長年にわたり本大会の開催と青少年の育成に御尽力されている青少年育成青森県民会議の皆様にも、深く敬意を表します。

本大会は次世代を担う中学生が、未来に向けての夢や希望、社会との関わりで感じていること、心に響いた出来事から生じた思いなどを発表することが、自分の生き方や社会との関係を考えるきっかけとなり、心身共に健やかに成長することを願い開催されているものと伺っております。

少子高齢化、国際化、情報化が急速に進み、環境が目まぐるしく変化する現代社会において、自分で考え行動していく力は一層重要なものになってきていると感じます。特に情報化に関しては、何か疑問が生じた際にはネットで検索すれば膨大な情報を一瞬にして手にすることができる時代になりました。しかし、情報が溢れている時代だからこそ広い視野を持ち、さまざまな立場の人の意見を聞き、自分自身で考えて行動する力を青少年期に身に付けながら成長していくことが大切だと思います。

本日発表をする8名の中学生の皆さんは、今日の日のために、自分の考えをどのように伝えればよい
か考え、言葉を選び、表現の仕方を工夫し、たくさん練習を重ねてきたことと思います。どうぞそ
の成果を十分に発揮してください。

また、聴き手として参加する三沢市立第一中学校の生徒の皆さんには、どんなところが自分と同じなのか、どんなところが自分と違うのかを考えながら聞いて、自分だったらどうするだろうかと自身に問いかけながら、考えを深めていってほしいと思います。

結びに、本大会が発表者の皆さんにとっても、聴き手の皆さんにとっても有意義なものになることを願うとともに、関係者の皆様方に心から感謝申し上げ、お祝いの言葉といたします。

【最優秀賞】

正解の無い世界へ

むつ市立田名部中学校 2年 二本柳 凜子



「どうして正解は一つしか無いのだろう」

私はずっと不思議に思っていました。

小学生の頃、毎日同じようなデザインの服を学校に着て来る子がいました。クラスメイトは、みんな「他に着るものがないのでは」とその子をからかっていたので、その子のように嫌われたくなくて、いちいち月の中でのなるべく似たような服を着る日がないように意識しました。

いつも授業で、みんなが今まで出した意見とは異なる意見を堂々と発表する子に対して友達が「あいつは自分たちと考え方が違うから関わりたくない」

と言っていたので、授業ではなるべくみんなの意見に合わせて、自分の本当の気持ちはなるべく表に出さない様にしました。みんなの言う「ふつう」と違う人が理不尽にいじめられ仲間外れにされる現実。そんな場面を幾度も目の当たりにし、「誰にも嫌われたくない」「嫌な思いをしたくない」と思うようになり、ずっとみんなが言う「ふつう」になるための努力をしてきました。

そんなある日のことです。友達が私に、こう伝えてきました。

「ねえねえ、りこ聞いた？ AちゃんとBちゃんが昨日、手つないで帰ってたらしいよ。」

「まじキモイよね。付き合ってたの？」

「りこはどう思う？」

本当は私は知っていました。Aちゃんは性別を問わずに人を好きになる人だということを。以前Aちゃんにそのことを伝えられた時私は、それが偽らないAちゃんの姿なんだからそれで良いのではないかと励ましの言葉をかけました。それが本心でした。でも、

「りこはどう思う？」と友達に聞かれ、私は結局自分の保身を選んで、

「やばいよね。」

と言いました。「やばい」という抽象的な表現を使えば、どちらの立場からも嫌われないで済むと思っていました。しかし、今でもずっとその発言を後悔しています。その時ちゃんと

「別におかしくなくない？」

と思っていることを伝えられていれば、その噂を知ったAちゃんが泣くこともなかったかもしれません。泣いているAちゃんを見て初めて気づきました。「彼女たちはただ自分らしく生きているだけなのに、なぜ私たちは世間が生み出した単なる固定概念でしかない「ふつう」という名の枠に合わせて、自分らしさを捨てることに必死なんだろう」と。本当はきっと人を傷つけること以外、この世界に不正解なんて無いのです。「多様性を大切に」等と、上辺だけで言うだけで、少しでも「ふつう」と違う人に対して、症状名を付けたり、悪口を言ったりして画一化し、これまでにない素晴らしいアイデアを持っている人を社会から排除していたのは私たち自身なのです。

私たちの学校では、去年丸一年かけて生徒が中心となって行うパネルディスカッションを何度も行い、多様性などの時代の変化に合わせ、全校生徒の手でジェンダーレス制服の創出や校則改訂のための討論会を行いました。五回目のパネルディスカッションで、私はパネラーとして話し合いに参加しました。緊張しながらも発言の順番になり

「男女問わず、靴下の色を、白のみでなく、グレーや黒など、選択できるよう改善してはどうか」

と、提案することができました。少数派になることで、周りの「ふつう」の枠から外れてしまうことを恐れ、より多くの人が納得してくれるであろう多数派の意見に合わせる私は、そこにはいませんでした。

つい、先日も全校生徒が百のグループを作って話し合う座談会では、様々な意見が飛び交い、誰も思いつかないような提案をした人もいました。そこに「ふつう」という概念は全く無く、自分たちの力で正解の無い世界を創っていけることを嬉しく感じました。

これから私は、私たち自身が生み出した「ふつう」の枠からはみ出すことを恐れませんが、それがいつか正解の無い全ての人が、自分らしく生きられる世界につながることを願って。

【優秀賞】

とても身近なもの

青森市立南中学校 3年 中村 有希



「ただいまー。」

「ゆうちゃん、大変、お父さんが病院に運ばれたって。」

居間から祖母が大きな声で言いました。父が大変な状況だということは何とか理解できましたが、私自身が受け止めることは難しく、「父が病院に運ばれた……。」という言葉だけが頭の中を巡りました。家族が当事者になるまで、自分は「障がい」というものとは無関係だと思っていました。でも、それは自分が思っていたよりとても身近なものでした。

私がそう思うようになったきっかけは、父が脳内出血で倒れてしまったことです。生活習慣が良いとは言えない父……。その父が倒れてしまうことは、偶然ではなく必然だったのかもしれません。手術をした父は、しばらく入院することになりました。自分にとって身近な存在である父が入院しました。私は、これまで大きな病気にならず、事故に遭うこともなかったので、それは衝撃的な出来事でした。更に大きな衝撃を受けたのは、入院中の父の姿でした。これまで元気に仕事をしていた父が、ろれつが回らなくなり、上手く言葉を話せなくなりました。しかも、左半身が上手く動かせなくなっていました。言葉にはできないくらいショックでした。

それまでの私にとって、障がいのある人はテレビの向こう側にいる、自分とはとても遠い存在だと思っていました。もちろん、障がいは生まれつきのものだけでなく、病気や事故によって負ってしまうこともあることは知っていました。それでも、自分や身近な人達は、大きな病気になることや障がいを負うことなく一生を過ごすのだろう、と漠然と考えていました。

父が倒れ障がいを負ってからというもの、私は、障害がある人に対する考え方が変わりました。以前は障がいをもっている人たちは、自分とは違う世界に住んでいる、自分とは全く違う存在のように思っていました。しかし、父と接していくうちに、その考えは間違っていたのだと気がつきました。障がいを負っていようがいまいが、父は私にとって大切な父です。これは、他の障がいがある人たちにも言えることです。身体の機能が少し違うだけで、根本的には健常者と言われる人と何も違いません。家族や友人にとって、かけがえのない存在です。

世の中には障がいがあるというだけで差別する人もいるでしょう。きっとそういう人たちは以前の私のように、「障がい」は自分にとって全く関係ないものだと思っているのではないのでしょうか。

私は、「障がい」があるかないか関係なく、相手が誰であろうと同じように接することを心がけたいです。障がいがあると、日常生活の中でも困る場面もあるでしょう。そのような場面があったら、自然に自分の手を貸せるような人間でありたいと思います。

逆に過剰に優しくするのも相手に失礼になるのではないのでしょうか。私は「障がいのある人に優しくしてあげているんだ。」「自分は良い人なんだ。」と思っているような人にはなりたくありません。あくまで同じ人間として「誰に対しても平等に接する人」でありたいと思います。

父が障がいを負ったことにより、私の「障がい」に対する考えは大きく変わり、障がいをもつ人をとても身近に感じるようになりました。また、このことがきっかけとなり、改めて様々な差別についても考えることができました。

私は、誰に対しても平等に接する人間でありたいです。その第一歩として「知ることを大切に、知ったことを「自分ごと」として考えてみる」ということを実践していこうと思います。

【優秀賞】

「大丈夫だよ！」

青森明の星中学校 3年 神田 杏花里



「学校生活、楽しくやれるかな？」

これは、三年前の私がよく言っていた言葉です。

小学校六年生の時、私は北海道から青森県へ引っ越すことになりました。十二歳から十三歳、中学生から青森の学校、青森の家、青森県での生活に慣れるか心配で、よく母に不安を口にしていました。母は、いつも

「大丈夫だよ！」

と、笑顔で私の背中を押してくれました。当時の私には、その一言が本当に支えになりました。そして、勇気づけられた大切な言葉でした。

しかし、入学してからの一年間は、本当に辛かったです。勉強、部活動、行事、人間関係、全部が全部うまくいくはずもなく、私は慣れない環境に耐えることに必死でした。学校には全然馴染めなくて、勉強にもやる気が全く出ません。家族に申し訳なさを感じていました。すると、母は、

「大丈夫だよ。あなたが健康でいてくれれば、それだけで、私は嬉しいよ。」

そんな優しさと温かさが詰まった言葉に、私は、また力をもらいました。何度ももらう母の優しい言葉に、なんだかやる気が湧いてきました。どんなに辛くても言葉一つで、もう一日頑張ってみよう、そう、思えました。

言葉の力。私は、あの一年で、何度もそれを感じました。言葉はよく暴力、凶器にもなると言われます。でも、その傷を癒やすのも結局言葉です。温かい言葉、優しい言葉、どちらも、人を助け、人を生かす原動力を持っています。しかし、言葉で傷つく人も多いのではないのでしょうか。私は、軽く言われた冗談でも、聞き流すことができず、傷ついてしまうことがあります。言葉一つで傷つき、言葉一つで救われ、案外人間は単純なのかもしれません。だからこそ、言葉は慎重に使うべきなのではないのでしょうか。言葉で傷を負った場合、その言葉を言った本人に伝えられるのか、急に放たれた言葉の矢を、一緒に抜いてくれる人がいるかどうかが問題です。

傷を一緒に背負って、あなたを心配してくれる人が必ずいます。その人を、思いきって頼るべきです。だって私たちは、まだ、子どもなのだから。何でも抱え込まなくていいのです。

言葉は相手を救うことも、殺すこともできるということを絶対に忘れてはいけません。もし、人の心をえぐるような言葉を言っているのなら、その人は、もう立派な加害者。人は一人では生きてはいけません。周りで気づいた人がいたら、自分には関係ないと知らないふりをするのではなく、優しく、温かい言葉を言い合ってください。

私は来年から高校生になります。また、慣れない環境で、うまくいかない日々が来るかもしれません。でも、きっと、私は、また誰かの言葉で、勇気をもらうはず。だから、私も不安がっている誰かを見つけたら、優しく声をかけ、

「大丈夫だよ！」

と言ってあげたいです。

【優良賞】

ひと助けの一步を

青森県立三本木高等学校附属中学校 3年 竹達 夏波



みなさんは、誕生日を心待ちにしたことがありますか。きっと、プレゼントがもらえる、ケーキを食べられる、「おめでとう」と言われるなど、特別感があるので楽しみにしている人が多いことでしょう。

私は数日前に誕生日を迎え、十五歳になりました。そして、来年の誕生日がとても待ち遠しく思います。高校生になったら、友達だけで遊べるところも増えるし、今よりも少しだけ自由になります。年齢を重ねていくと、今までできなかったことができるようになりますが、私が一番心待ちにしている理由は、十六歳になったら「献血」ができるからです。

献血は、健康な人が自らの血液を無償で提供するボランティアです。医療の知識や技術がない人でも、間接的に命を救える行為が献血なのです。

私の祖父は、自分で血液をつくる機能が低下しているため、輸血が必要な状態です。給食の牛乳パック一本分もある二〇〇ミリリットルを輸血しに病院へ通っています。輸血すると「体が楽になる」と祖父は言っていました。誰かの血が祖父をいつも助けてくれています。

私は今まで輸血といえば、交通事故や人身事故など、外部要因で貧血症状が起きた場合にするものだと思っていました。しかし、祖父のように自己要因の場合もあり、いろいろなケースがあることを初めて知りました。それ以来、輸血のことも献血のことも、もっと知りたいと思うようになりました。

私が調べてわかったことは、まず、献血によって集められた血液から、輸血用血液製剤や血漿分画製剤の二種類がつくられることです。次に、献血は輸血で使われるのだと思っていましたが、献血血液のおよそ半分は、血漿分画製剤という薬に使われているそうです。これは、やけどやショックなどの場合に使われる薬や、血友病、川崎病などの病気に使われる薬を指します。様々な病気やけがの患者さんの治療に役立っていることが分かりました。そして、献血は、十六歳からできるということを知り、衝撃を受けました。血液は人工的につくることができず、また、長期間保存することもできないため、多くの方の献血への協力が必要です。あと一年たったら、私にも、ひと助けができるのです。

世の中には、輸血を必要としている人がたくさんいます。私が調べた限りでは、年間一〇〇万人いると言われています。以前、テレビで白血病の人や再生不良性貧血という指定難病の人の姿を見たことがあります。「輸血が自分の生きる道」だと話していました。でも、自分に合う血液をもっている人は少ないそうです。自分の命をつなげてくれる人が数人しかいない現実を目の当たりにしながらも、毎日「奇跡」を信じて、懸命に生きていました。今日もどこかで誰かが、「明日も生きたい！」と必死に願っているのだと思うと、私は献血をせずにはいられません。

街中で見かける献血バス。今まで何も思わずに、景色の一つだったもの。しかし、祖父の話から興味をもち始め、自分で調べたことで見方が変わりました。家族である祖父を助けることができます。

私は早く十六歳になりたいです。みなさんも献血に行きませんか。誰かの笑顔のためにひと助けの一步を！

【優良賞】

「戦艦大和」から考える

三沢市立第一中学校 3年 萩野 一步



「皆さん、戦艦大和を知っていますか。戦艦とは軍艦の中で最大級のサイズ、大砲をもち各国海軍の主力と位置付けられた艦のことを指します。したがってその国の工業力の象徴です。一九四一年に完成した大和はそのまま、太平洋戦争に参加します。戦艦大和の特徴はまず、世界最大級の四十六センチ砲です。四十六センチとは砲弾の直径のことで、高さ二メートルもある砲弾が発射可能でした。この巨大な大砲を計十二門も搭載していました。

次に、三千人分の食事の調理可能な烹炊所です。巨大な艦を動かすのに三千人もの海軍兵が乗っていた大和では、食事の用意も大変でした。有名な海軍カレーもここでつくられていました。米は二つの洗米機で洗われた後、一度に六百合炊ける六基の六斗炊き蒸気窯で炊かれました。家庭用の炊飯器で換算すると、百二十個分にもなります。他にも、一時間で四〇〇リットルものお茶を生成できる茶湯製造機。ラムネ製造機まで搭載されていました。これらは、兵の士気を保つために、とても大きな役割を果たしたそうです。そんな世界最高峰の戦艦は米海軍の航空機によって、一九四五年四月七日に鹿児島沖で沈没します。戦いの主役が戦艦から航空機に変わった時代でした。大和は大きな戦果をあげたわけではありませんが、当時の日本の工業力の結晶だったのです。」

中学一年の国語の時間、「自分の好きなもの」というテーマで行われた一分間のスピーチで私はこう言ってスピーチを終わらせました。クラスメイトはスポーツやゲーム、アニメについて話している中、私は『戦艦大和』の話を五分ほどもかけてしたのでした。一年生の一学期、まだクラスに深くなじめていない時期に五分もこのようなスピーチをされたら、皆さんはどう思うのでしょうか。興味関心、困惑、驚きなど様々な感情を抱き、下手したら変人とみなすかもしれません。私はスピーチを終えた瞬間、調子に乗って話し過ぎたと焦っていました。しかし、予想とは裏腹にクラスメイトは、私の話を楽しそうに聞き、私の戦艦好きを認めてくれました。それはクラス換えを行った今でも同じです。昨年の文化祭の学級テーマは『大和魂』そして、戦艦大和の模型を作りました。私たちの学年は自分の好きなものを好きと言え、それを認め合えるそういう学年だと思っています。

私が住む三沢市は米軍基地があり、国際的な交流が盛んな珍しい街です。そのためハーフの方や外国の方が多く、私の友人にもいます。外国の方が多く影響で多様な価値観や考え方などが学校全体や街全体でも認められていると思います。

現在の日本は多様な社会に向け、様々な取り組みが行われています。人種、ジェンダー、価値観、文化・宗教など、様々な違いが多く存在している世の中です。その違いに気づかず、なにげなく発した言葉や行動が相手を傷つけ、大きな問題に発展することもあります。多様性を認めることはとても難しいものです。そんな多様な社会に向けて、私たちが一番に心掛けていかななくてはならないことは、自分の持つ文化などを疎かにしないこと、そして相手の大事にしているものを認めることではないでしょうか。相手と自分の違いに目を向け、お互いにそれを尊重しようという姿勢が大切だと思います。

私は『戦艦大和』からとても多くのことを学びました。八十年前の方々が戦艦大和にかけた思い、当時の工業力など、現代にも受け継がれているものがたくさんあります。私は将来海上自衛官になりたいと思っています。護衛艦に関わる仕事につきたいと思ったからです。自分の好きなことを突き詰めることによって、教養が深まり、将来の方向性も見えてきました。また、自分の大切なことが見えてくると、相手の大切なものを尊重しようと思えてきました。

『戦艦大和』はこれからも私を導く羅針盤であり続けるでしょう。

【優良賞】

言葉の宝箱

風間浦村立風間浦中学校 3年 中島 優月



みなさんは、他の人からもらった言葉で、「嬉しいな」とか、「ちょっと傷つくな」と感じたことはありますか。

日常生活で言葉を交わして会話をしている私たち。もしかしたら、自分が何気なく言った言葉が、相手にとっては凶器になってしまっているかもしれません。

私は以前、同じ学校の男子に、一番言われたくない言葉を言われてしまいました。

「お前って、頭悪いね。」

私の学級はみんな仲が良く、彼ともいつも冗談を言い合っていたので、そんなノリで言ったのだと思います。でも、私の心に突き刺さったこの言葉は、悔しさや悲しさ、腹立たしさといった感情で、私の心をぐちゃぐちゃに切り裂きました。

このように、自分がおもしろがっていった言葉が、相手にとってはコンプレックスで、そのことで悩んでいたとしたら、その言葉によって自己嫌悪に陥り、最悪の場合、自ら死を選んでしまうこともあるのです、言葉が凶器となって……。

よく耳にするSNSでの誹謗中傷も同じです。誰でも、「みんなやっているから安心。」といった考えをもっていると思います。そういう私も、その一部の人間です。「みんなこの人をいじっているから」という身勝手な理由からその人をいじってしまうということが、今まで多々ありました。今思えば、その人が嫌だと感じていたら立派ないじめになっていたのではないかな……。SNSで誹謗中傷している人たちを腹立たしく思っていたけど、SNSでなくても、私がしていたことは現実で起こっている誹謗中傷になってしまうのではないかな……。そう思いました。

そんな私ですが、今まで、友達や家族、先生方からたくさんの嬉しい言葉をもらっていたことにも気づきました。

私は、中学校に入学して部活動に入ったときから、同級生が一人もない状態でした。最初はやめたいと思ったこともありましたが、先生方、先輩、家族にたくさん支えてもらい、3年間続けることができました。最後の大会で先生に、「今まで一人で大変だったと思うけどやり切ったな」と言われたときは、3年間のいろいろな思いがこみ上げてきて、涙があふれました。今まで辛くても一人で我慢してきたけど、先生からこの言葉をもらった時に、「やってきてよかったな」と感じました。私にとってこの言葉は、宝物となりました。

自分自身を振り返ってみると、言葉というものは本当に、凶器にもなるし、力を与えてくれるものにもなるということを学びました。これからは、私の言葉が誰かにとっての凶器にならないように、自分の発言に責任をもち、周りに流されずに生活していかなければならないと思います。そして、私自身の言葉の宝箱を嬉しい言葉でいっぱいにして、今度は私が、誰かにとって力になる言葉を言える人になりたいです。

【優良賞】

心の通い合う時間

階上町立道仏中学校 3年 濱谷 舞香



インターネット上に自分の名前があったとしたら、あなたはどのように感じますか？平気ではないですよ。不安や恐怖を感じる人がほとんどではないでしょうか。内容によっては、死を意識する人さえ出てしまうのです。

私のクラスのほとんどの人はスマートフォンを持っていますが私は持っていません。母にスマホを買ってほしいとお願いしたことがありましたが、母は許可してくれませんでした。母がなぜ許可してくれなかったのだろうと考えた時、自分がスマートフォンの良い面にしか目を向けていなかったことに気がきました。

スマートフォンには、情報の発信・受信の便利さなど多くのメリットがあり、現代では使わない人はほとんどいません。しかし、便利だからこそ危険性があるのです。

私なりに調べてみたところ、衝撃の事実がわかりました。スマホ開発者のスティーブジョブズ氏やビルゲイツ氏、その会社の幹部は十四歳になるまで、我が子にスマホを持たせませんでした。ジョブズ氏はインタビューに対して、「iPadをそばに置くことすらししない」ときっぱりと語っています。また十四歳以後も、子供達にはデジタル機器の使用について細かいルールを決め、子供達のスクリーンタイムを厳しく制限していました。それはなぜだったのでしょうか。

理由は、開発者だからこそ気付いた、スマホの依存性の高さです。絶えずドーパミン放出を得られるスマホを、コントロールしながら使うことは大人でも大変難しく、付き合い方を間違えれば、うつになる可能性もあるのです。最愛の我が子がスマホ依存に陥ることだけは避けたかったというのが禁止の真相でした。

依存の他にもSNSには多くのリスクがあります。インターネットにつながる環境さえあれば、悪口を書いたり、無視したり、仲間外れにしたり、他人に見られたくない写真を投稿したりと、いつでも、どこでも、誰でも、いじめに巻き込まれる危険性があるのです。その誹謗中傷は、ネットの記録に残るだけでなく、記憶にも残ります。匿名で悪口が書き込めます。周囲に気付かれにくいので、誰にも相談できず、一人で抱え込み一人で命を絶つ。これがネット上のいじめの恐ろしさです。

増加の一途をたどっているネットのいじめ。怒りに震えた被害者の親が、加害者を特定し莫大な慰謝料を請求するなど、その被害は、大切な家族や周囲の人達にまで及ぶのです。

私は小学校の時に人間関係に悩み不登校になった時期がありました。私はそのようなことになるまではいじめや不登校に関して他人事のように感じていました。学校に行きたくない気持ちがつのると、胃の痛みも出始め、車で学校に送ってもらっても車から降りることができなくなりました。母は無理に登校しないで休んでいいと見守り、姉は私のために泣いて寄り添ってくれました。話を聞いてくれた先生や友人、家族の支えもあり、私はその辛い時を乗り越えることができました。全ては心の通い合う時間のおかげでした。

私達は、まだ大人になりきれない小人（ことな）です。小人の私達にとって大切なものは何だろう？ 私なりの答えを見出すことができました。

何よりも大切なのは、情報社会を生きる私達の意識です。スマホは便利なツールですが、使い方によっては凶器にもなる。何気なく呟いた一言が他の誰かを傷つけているかもしれない、ということを常に心に留めておくことは私たちの責務であると強く感じました。

青春の小人時間にどっぷりスマホに依存し、振り回されて生きるなんてもったいない、と私は心から思います。私もいつかスマホを持つ日が来ますが、ぶれることなく、心の通い合う時間を大切に生きていきたいです。

【優良賞】

外から自分を見つめて

風間浦村立風間浦中学校 1年 林 大聖



陸上競技部に所属している僕は、中学校での初めての中体連夏季大会で砲丸投げに出場した。結果は予選落ちだった。しかし、この結果以上に、考えさせられたことや学んだことがある。大きな収穫を得たこの日を、忘れることはない。

大会当日、最初のウォーミングアップを終えた僕は、テントで少し休憩していた。すると、八時まで砲丸のピットが使えるということを耳にしたので、早速練習に向かった。しかし、すでに他校の選手がずらりと並んでいて、緊張していた僕は、なかなか練習をスタートさせることができずにいた。このまま躊躇していても時間がなくなるだけだと感じ、焦る気持ちを抑えて、勇気を出して近くにいた他校の選手に練習への参加の仕方を尋ねた。その人は、自分も練習や本番が控えているというのにもかかわらず、嫌な顔一つすることなく、指をさしながら親切に教えてくれた。僕はそれまでの緊張や不安が解け、心が温かくなるのを感じた。すぐにお礼を言い、その後、練習に参加することができた。

練習を終えて自分の競技が始まるまで、チームの仲間の応援に向かった。テントから出て歩いていると

「あ、さっきの人だ！本番も一緒にがんばろう！」

と、声をかけられた。振り返ってみると、僕に親切に教えてくれた他校の選手だった。声をかけてくれたことが嬉しく、その言葉に励まされ、

「うん、さっきはありがとう。がんばろう。」

と返答した。

いよいよ競技が始まった。僕は冒頭でも述べたように、予選落ちした。練習どおりの力を発揮できず、平凡な記録に終わった。残念で悔しかった。一方で、声をかけてくれた先ほどの選手はトップエイトに入り、決勝に進んだ。思わず僕はその人の元へ駆け寄り、

「次もがんばってください。」

とエールを送った。すると、笑顔で頷いてくれた。その笑顔でまた、僕の心は温かくなった。

来年は僕も、先輩と呼ばれる立場になる。良き手本とならなければいけない。そのためには、競技に向かう姿勢、普段の生活態度や言葉遣い、公共の場でのマナーなど、僕のことを知らない人が僕のことを見たときに、どんな印象をもつのかを客観的に考えてみようと思うきっかけとなった。

また、不安を抱えて始まった大会だったが、僕が選手として出場するにあたって、たくさんの人に助けられていたのだということにも気が付いた。選手としての自分を外側から見てみると、仲間、先輩、先生方や家族、そして、他校の選手や大会関係者など、多くの人の支えの元で選手として成り立っているということが分かった。

みなさんは、自分がどんな場面で、どれくらいの人に支えられているか考えたことはありますか。いつも自分から見えている世界だけではなく、一度、外から冷静に自分を見つめ、自分の姿や感謝すべき存在について考えてみてはどうですか。

【講 評】

青少年育成青森県民会議
青少年専門指導員 坂本 徹



発表してくれた皆さん、お疲れ様でした。熱心に一生懸命発表してくれて、すごいなと思いました。

私も中学生のときに弁論大会に出たことがあったのですが、今日の大会とレベルが全然違うなと思いました。審査するときも、私だけではなく審査員の皆さんが頭を抱えてしまうくらい、皆さんの発表は非常に立派だったと思いますし、ここ数年審査員をさせていただいていますけれども、その中でも、今年の発表は非常に優れていたなというふうに感じています。これほど意識や考えをしっかり持って、そして行動するのは本当にすごいことだと思いました。

二本柳凜子さん。自分らしく生きることの大切さ、素晴らしさを教えていただきました。心の移り変わりとか、最初は保身をしてしまったこととか、そういう自分の弱い面についても正直に話をしてくれました。「普通」って何でしょうね。よく我々は「普通、普通」って言ってしまいますけど、その「普通」って本当に良い「普通」なのかどうかということを考えさせていただきました。そういう「普通」を脱却して、自分らしく生きるということに対しての意識を感じました。本当に良い発表だったと思います。

竹達夏波さん。「二十歳の献血」という言葉をよく聞きますが、十五歳から十六歳の献血を目指すのはすごいなと思いましたし、献血の大切さをよく調べたなと思いました。命に関わるボランティアというのは、なかなか中学生レベルではできないんですが、献血を通してそういうことができるということを教えていただきましたし、あなたにとってはこの献血というものが第一歩なんですね。これからいろんな所でいろんな人のためにできる、献血以外のことも考えてくれたらいいな、というふうに感じています。

中村有希さん。お父さんの病気がきっかけになっていましたけれども、優しくしてあげているとか、自分は良い人だと思っている人になりたくない、という言葉が印象に残っています。障がいのある人たちを見ると可哀想だと感じてしまう人も多いし、その感情は間違っていないんですけども、それだけだと分かり合えない。そのことを感じているのはすごいなというふうに感じました。そして、知ることを大切にして自分のこととして考える。見習っていききたいなと思います。

萩野一步さん。戦艦大和、よく調べましたね。私も大好きでした。今の中学生で戦艦大和ということかなりマニアックだなと思いましたけども、そこから始まって、多様性とか、人種とか、ジェンダーとか、価値観、文化、宗教。そちらの方へ考えが巡っていくのはすごいなと思いました。最後に、自分の文化を疎かにしない、相手の大事なものを認めるというのは、すごく大事なことだなと思いました。

神田杏花里さん。お母さんの「大丈夫だよ」という言葉に励まされたこと、それによってここまで来たんだと思います。逆に何気ない言葉で傷つくこともあったのかもしれません。でも、優しく温かい言葉を言い合おうというあなたのメッセージが、今日ここにいる皆にも伝わったのではないかなと思います。ぜひ、これからも「大丈夫だよ」を言える人になってもらえたらいいなと思いました。

中島優月さん。部活をやっている中で、嫌なこととか辛いこともたくさんあったでしょうけれども、その中で部活の先生からもらった言葉が宝物になった。その言葉がとても印象的でした。その言葉の宝箱を嬉しい言葉でいっぱいにして、誰かの力になる言葉を言えるようになっていってもらえればいいなと思います。

濱谷舞香さん。スマホのことですね。中学生も高校生も結構使っていると思うし、あまり意識しないで使っていると、いわゆるマイナスの部分、負の部分というものはほとんど誰にも見えません。私

自身も、スティーブジョブズやビルゲイツがそういうことをしていたのは知らなかったのですが、ちょっとびっくりしましたが、便利なものは確かに便利です。「小人（ことな）」という言葉がすごく印象的でしたが、小人時代をスマホに依存して、振り回されて生きるなんてもったいない、スマホをもってぶれることなく、心の通い合う時間を大切にしたい。これは大人になってしまった私も見習いたいと思います。なんとなくスマホをいじってしまって、だらだらと時間を過ごしてしまっている自分が恥ずかしくなりました。

林大聖さん。陸上競技の大会で、他校の選手と励まし合ったことを通じて、自分も選手として出場していくためには、仲間とか先輩、家族など多くの人の励ましや支えがあったということに気がついたということでした。外から自分を見つめる、つまり客観的に自分を見るということはすごく難しいですが、そういうことができたなら成長に繋がるんだろうなと。これは中学生だけでなく、高校生や大学生や社会人、私みたいに年をとった者にとっても、やっていかなければならないことだなと感じました。

今日の発表はみなさん非常に素晴らしかったですが、もう一つ素晴らしかったのは、聴いていた三沢市立第一中学校の皆さんの態度です。今の時代、コミュニケーションがすごく大事だとよく言われています。コミュニケーションの力には、大きく分けて二つあります。話す力と聴く力。コミュニケーションが苦手だという人は、話すのが苦手だと思っている人が多いようですが、実はどちらが大事かというと、聴く力のほうが数段大事なんです。今日は皆さん、発表者のいろんな話を、自分のものとしてしっかり聴いてくれたということを、後ろの審査員席から見ていて感じることができました。そしてもう一つ、代表で萩野さんが話してくれましたけど、この三沢という街は青森県の中でもちょっと変わった街だったりします。特に、基地がある。そういう見方をすると、多様性に囲まれていることが普通になっている街なのかもしれません。こういう環境の中で、皆さんはいろんな多様性に出会うことができると思うので、出会ったものを見逃さずに、自分の考えと照らし合わせながら相手を認めるということを、考えていていただければいいと思います。

最後に、多様性について少しだけお話をして終わりたいと思います。中学生である皆さんは、これから高校、あるいは大学や社会に出て行って、いろんな人と出会うと思います。その中では、自分と考え方が違ったり、意見が合わない人がたくさんいると思います。いろんな困難や、異なる価値観に出会うはずですが、でも、多様性ってやっぱり、皆さんが発表してくれたようにすごく大事なことです。多様性を大切にしようとか、多様性は大事だっていうのは、なぜだと思います？多様性のもとになっているのは、価値観というものの存在だと思います。人はみんな価値観が違います。なぜかという、まずひとつはDNAが全然違う。もうひとつは、生まれてからこれまで生きてきた環境が違う。仮に一卵性双生児であっても、環境が違いますから、価値観がまったく同じにはなりません。ですから、この世の中にいる人たちは、みんな違って当たり前なのです。自分と考えが違うことは、良い意味で普通なのです。もう一つ、価値観は違った方が良いということを、ぜひ考えてみてください。同じ価値観だと、いろんなことが起こります。日本がかつて戦争に突入していったとき、日本は、同じ価値観を皆が共有するような教育をしてしまいました。それが結果として戦争に繋がってしまいました。自分の価値観と近い人、意見が合う人と一緒にいるのは心地よいですが、進歩がありません。自分と考え方が違うひとと、どうやったら折り合いがつけられるだろう、どうやったら一緒にやれるだろうと考えるからこそ人間は進歩していける。そうやって価値観が違う人たちと自分の両方の価値観を大事にして、多様性の中で生きていくことができれば、皆さんは一回り成長した自分を見つけることができると思います。

今日は8人の方がいろんな意見を発表してくれましたけれども、ぜひ、このことを自分のこととして考えながら、これから生きていけるといいなと思いました。

聴いてくれた皆さん、話してくれた皆さん、大きな拍手をして終わりたいと思います。

ありがとうございました。

第46回「青森県少年の主張大会」実施要綱

1 趣 旨

少子高齢化、国際化、情報化が急速に進み、環境が目まぐるしく変化する現代社会において、次代を担う子どもたちには、心身ともに健康で他者を思いやる心を持ち、社会的に自立していける、健やかな成長が求められている。そのためには、広い視野と柔軟な発想や創造性などと共に、物事を論理的に考える力や、自らの主張を正しく伝え、理解してもらう力などを身に付けることが大切である。

未来に向けての夢や希望、社会との関わりで感じていること、心に響いた出来事から生じた思いなどを中学生が発表することにより、自分の生き方や社会との関係を考えてるとともに、同世代や大人の、青少年に対する理解と関心を深めることを願い実施する。

2 審 査 日

令和6年9月10日（火） 13時30分から15時30分まで

3 主 催

青少年育成青森県民会議、独立行政法人国立青少年教育振興機構

4 後 援

青森県、青森県教育委員会、青森県中学校長会、青森県私立中学高等学校長協会、青森県PTA連合会、三沢市教育委員会

5 審査会場

三沢市立第一中学校 体育館
(三沢市松園町2丁目1-34 電話：0176-53-3904)

6 実施方法

所定の内容で県内中学生から募集し、原稿審査で選考された8名による主張発表を行う。

7 次 第

- (1) 開会
- (2) 主張発表
- (3) 審査
- (4) 結果発表及び表彰
- (5) 閉会

8 表 彰

主張発表を行った8名の中から最優秀賞1名、優秀賞2名、優良賞5名を選考し、賞状と記念品を贈る。

9 そ の 他

最優秀賞を受賞した者は「少年の主張全国大会」（以下「全国大会」という。）出場候補者として推薦され、ブロック代表を選考する審査委員会による審査の結果、北海道・東北ブロック代表（2名）として選考された場合は、全国大会に出場する。

【講演】

「世界から見た日本の魅力と起業のすすめ」

材株式会社 代表取締役 浄法寺 朝生 氏



拍手、ありがとうございます。

さっき紹介されたんですけども、私もこの中学校の卒業生です。みんな知らないかもしれないけれど、その頃は坊主でなければならないという決まりがあって、私たちが1年生のときに頭髪自由化委員会のようなものを堀口中学校と合同で立ち上げて、「全員坊主でなくてもいいんじゃないか」という提案をして、1年生の3学期くらいに坊主でなくても良いということになったんです。みんなも文句ばかり言うのではなくて、自分から行動を起こしていけば社会が変わっていくこともあるので、そういう活動をしてほしいなと思います。

今日の題目に「世界から見た日本の魅力」とあるんですけども、色んなところでグローバル意識を身につけるとか、狭い世界じゃなくて視野を広げて生きていこうみたいな話があると思います。グローバルというと、英語を話して世界のひととやりとりをしてというイメージがあると思いますが、私が考える本当のグローバルというものは、自分の地域の魅力を海外の人に紹介できる。そういうひとがグローバル目線を持っているんじゃないかなと思います。あとは「起業のすすめ」ということですが、今日私が伝えたいメッセージは、大きく分けて二つあります。世界を見て地元の魅力を紹介できるひとになってほしい。もう一つは、将来就職するときに、起業をするということも選択肢の一つとして入れてほしいということです。

起業って、会社をつくるってどういうことだろうと思うかもしれませんが、中学生でも会社をつくっているひとが結構います。会社をつくるだけなら、法務局に行って申請をすればつくれてしまいます。ただ、それだけでは意味がないと思っていて、困っている人を助けるとか、地域を良くすることが大事です。私は中学生の頃、近所のおじいちゃんがまだ元気なのに定年退職して、元気なおじいちゃんが働ける会社をつくりたいなと思って企画していました。今、実際に会社には65歳以上の高齢者のチームがあります。あと、うちは貧乏でお小遣いももらえなかったんですが、新聞配達なら中学生でもやっという学校で言ってもらえたので、4時に起きて新聞配達して、6時くらいから学校の準備を始めるといったことをしていました。

会社をつくってほしいと言っているわけではなくて、勉強が勉強だとしたら、実践はひと助け。勉強と実践の両立で人間は成長していくものだと思っているので、勉強も大事なんですけど、誰かを助けるということも中学校のうちからトレーニングできます。身近なひとを助けられるようになってほしいと思います。ここにいる全員が明日から行動を起こすということは難しいかもしれないけれど、二人でも三人でも「何かやろう」と思える人が出てきたら、私は今日来た意味があったなと思います。

今日は地域課題解決について話そうと思います。IT企業を経営しているのでITについて紹介するこ

ともありますが、ITはあくまでもツールで、料理人というと包丁です。ITを使って地域をより良くしていくということを、20年ほどやってきています。

1. ITを通した地域の魅力発信

例えば、韓国に行きたいなとか、ディズニーランド行きたいなとか、アメリカに行きたいなとか、そういうのはイメージできると思うんだけど、アフリカに行きたいという人はなかなかいない。何が言いたいかというと、知っている所は行きたい所の選択肢に入るけれど、知らない所はその選択肢にすら入りません。残念なことに、日本の中でも青森というと、世界では誰も知らない所です。だから、この街の認知をしてもらい来訪する理由を創っていくというのは、ネットの中に情報を載せていく。YouTubeとかTikTokとか、若い人が使うツールって、私たちが20代のときと変わってきているけれど、そういうツールでも青森とか三沢の情報を発信していきたいなと思っています。

2. 青森の「素材」を商品化する

これ、何かわかります？りんご飴。これはキャンディーアップルというブランドで、素材を見たら青森県産りんごって書いてあります。1個750円くらいで売られています。でも、青森の農家に入ってくるのは、りんご1個につき100円くらいなんです。私の仕事に「青森の素材を商品化する」というものがありますが、何かというと、素材で売ると1個100円でも、商品にすると750円になります。収入が7倍になったら、給料も7倍にできる。青森は所得が低いと言われているけれど、所得を上げていくために、素材を商品にしていくという活動をしています。給料が安いと文句を言うことは誰でもできるけれど、実際に所得を上げる活動をしている方はなかなかいません。だから、その実行者になりたいということで、三沢市でたくさんとれる長芋を使って伝統のとろろを作って売っています。農家さんの収入が上がるように、少し高く買っています。

3. 働きたくなる仕事を創る

青森県の住民意識調査で、「魅力的な仕事が少ないから外に出る」とか、一旦県外に出た青森県出身の方からは「仕事さえあれば戻ってきたいが、仕事がないから戻ってこれない」といった声がすごく多かったんです。それで、カッコいい仕事を創ろうと思って、昨年、市立病院の向かい側にオフィスを作りました。青森ヒバとか、南部裂織とか、青森県の伝統工芸品の会社が作ったんですが、働きたくなるカッコいいオフィスを創りたくて、そういう活動をしています。ここにはIT企業とか、服装が自由な会社が入っています。最初は服装が自由なんてありえないでしょうという声もありましたが、今は若手の意見も聞いて、服装自由で髪も染めてよい、あまり制限のない雰囲気が出来てきています。

今は20社くらい入っていて、東京の会社やアメリカの会社もあって、多様性の象徴みたいな感じになっています。職場実習とかインターン等も受け入れています。

昔、木崎野牧には、一番多い時で八千頭くらい馬がいたといわれています。木崎野小学校の校歌にも馬の蹄の音とあります。かつて馬の文化があったんだけど、今は馬に乗ったことのある人、触れた

ことのある人はほとんどいません。八千頭いた馬も、今はうちで飼っている六頭くらいしか残っていません。だから、この馬たちがいなくなると、三沢には馬がいなくなってしまう。昔はいたけれど今は見る機会がなかったので、三沢の馬文化を守っていくということで、観光客を受け入れる場所として三沢ホースパークという馬と触れ合える場もつくりました。

長芋すりおろして、馬飼って、オフィス作って、このひと何やっているんだろう？みたいなことをよく言われますが、地域課題解決をしています。

4. 中学生とITを使ったお仕事

みんなに関係あると思って持ってきた話ですが、LINE。堀口中学校と一緒に、LINEの広告を三日間のインターンの中で作りました。勉強と実践の実践として、中学生が作った広告をLINEで配信しました。青森県中の仕事を探している人が、中学生の作った広告を見てクリックして、うちの会社に応募する。三日間でやったんだけど、これも仕事として成り立っています。多分、2、3万円くらいでは買い取れるくらいの出来でした。中学生でもそのくらい稼げるということを体験してもらいたくて、何をしたかという、キャッチコピーを考えました。相手の気持ちに立って、仕事を探しているひとってどうして探しているのかということを考えました。「今の仕事がいやだから」とか「サービス残業が多いから」とか。中学生が親に「仕事をやめたいと思ったのはどんなときですか」とインタビューしたら、親が答えのが、「自分の時間が少ない時」「残業が多すぎる時」という事でした。そこで、もっと時間に余裕が出る会社に行こう、というのが伝わるキャッチコピーを考えてもらいました。

キャッチコピーを考えるのに一日、画像とキャッチコピーを配置してLINEで実際に配信するのに一日、最後の一日でホームページに載せて、それを親や先生たちが見て、中学生でも3日でこんなにできるんだ！うちの子こんなに成長したんだ！という事を実感できるインターンシップにしました。

こんなに三沢や青森のために頑張って、三沢や青森が好きなんだと思うかもしれませんが、実は寒いところが嫌いで、一生サーフィンして過ごしたいなと思っていて南の島が大好きでした。青森を脱出してハワイに住んでいたこともあります。なぜ青森に戻ってきて青森で会社をつくったかという、ハワイには不思議な仙人みたいな人がいるんですが、その人に言われた一言がきっかけです。「言葉の力」というテーマで話してくれたんですが、どんなことを言われたかという、「日本の若者は日本の魅力を説明できない。朝生より私の方が、日本の魅力を説明できるよ」。こう言われたとき、ショックを受けて、今まで文句ばかり言っていた自分が恥ずかしくなりました。日本に帰ってきてからは、日本の文化とか青森の魅力って何だろうと、自分の身近なところに対して魅力を探すようになったら、すごくいっぱい見えてきました。

私が思う世界から見た青森の魅力とは何かというと、先進国の経済的余裕、時間的余裕もあるし、世界が失ってしまった太古からの自然が保存されているところだと思います。ということで、繰り返しになりますが、色々な世界を見て、海外に行ったときに、三沢ってこういうところなんだよと紹介できるようになってほしいと思います。それと、起業。世の中には大学生、高校生、中学生でも起業

している人がたくさんいます。三沢にはまだいないけれど、一人出てくるとそれに続く人も出てくるので、第一号を目指してほしいと思います。

（よくある質問紹介）

Q. 勉強って必要ですか？大人になって使わないと思います。

A. 社会人になると課題解決能力がすごく必要になります。勉強も、この教科だから必要、この教科だから必要じゃないということではなくて、全部脳のトレーニングです。課題があって解決する。その繰り返しで課題解決能力が身についていきます。それが自分の課題から隣の人の課題へと広がっていったら、能力が高い人になると日本や世界の課題を解決できるかもしれない。全部の勉強が必要だし、もっと言うと実践も必要。勉強した力を使って、実践として人を助けるということが大切。

Q. 会社をつくる時に何が必要ですか？

A. 会社をつくるだけなら簡単ですが、流れてくる情報だけでなく、自分から情報を取りに行く力がとても大事です。相談したときに「できない」って言われるのは結構当たり前で、やったことのないひととはできないと言うけれど、できるひととはできる理由を教えてくれる。やったことある人に話を聞いてみる、周りの人に聞いてみるというのも大事です。

（質問コーナー 生徒→浄法寺さん）

Q. 大学はどこですか？

A. 八戸の大学です。当時はサーフィンのことしか頭になくて、海に近いからという理由で選びました。みんなは進路を決めて、そこに近い大学や専門学校に行くといいと思います。

Q. 起業して辛かったことは何ですか？

A. リアルな話をすると、給料が払えなくなったことなどはプレッシャーでした。あとは、みんなのためにとやっていることが、批判を受けたことは結構辛かったですね。でも、辛いことを乗り越えることも、自分を成長させるためのトレーニングだと思っています。

Q. 起業のメリットとデメリットを教えてください。

A. デメリットは基本的にないと思っています。ただ、人を騙すような会社をつくっている人たちもいるので、そういうのはデメリットだと思います。

第46回 少年の主張全国大会～わたしの主張2024～

内閣総理大臣賞

一隅を照らす

宮城県 栗原市立栗原南中学校 三年 ケイバージーバ

「一隅を照らす」という言葉を知っていますか？この言葉は、パキスタンとアフガニスタンで三十五年もの間、病気の人達や貧しい人達のために医療や開拓などの支援活動を行ってきた医師、中村哲さんが好んで使っていた言葉です。

私が中村哲さんのことを知ったのは、小学四年生の頃。「日本人でそんな人がいるなんて……。」「とても勇気のある人だ。」と強い感銘を受けました。

「私も中村さんのようになりたい……。」

「困っている人達を救いたい。」

自分には今、何ができるのか、自分はどう生きていくのかを考えることが多くなりました。

私は、アフガニスタン人です。パキスタンの小学校に入学しましたが、父の仕事の関係で、四年生からは、日本で生活しています。

六年前に日本に来たときは、家族みんな日本語が全く話せず、言葉の違いや文化の違いに戸惑いました。

パキスタンの学校では、よく分かっていて勉強が、日本の小学校では、全然ついていくことができず……「日本語が分からないから仕方がないか。」と思う自分と「悔しい。何とか分かるようになりたい。」と思っている自分がいました。

日本語が少し分かるようになり、日本の文化にも慣れてきた頃、始まった中学校生活。

待っていたのは、辛い日々……。テストのためにどれだけ勉強しても分からないことだらけで、負けず嫌いな私は、仲のいい友達にも負けたくなかったのも、ストレスが重なり、「もう嫌だ。死んでしまいたい……。」

そう思うことが何度もありました。どうしようもなく泣いたこともあります。

そんな絶望的だった私を助けてくれたのは、友達や先生方でした。周りの人たちが話を聞いてくれたり、おもしろいことを言って笑わせてくれたりして救ってくれました。両親も、いつも応援してくれました。

「私も周りの人を助けてあげられる存在になりたい。」そう思うようになりました。

アフガニスタンには、病院も水もない場所があります。そこで中村さんは、「一隅を照らす」「自分が今いる場所で、自分にできることを一生懸命やる」といった精神で、医師として、人として多くの苦しむ人達を助けてきたのです。

私の将来の夢は、医師です。現在のアフガニスタンでは、女性が学校に通えるのは小学校までで、女性が教育を受け、就職する機会が奪われています。私の親戚も女性は働いていません。私の母は「自分は勉強できなかったから、ジーバにはさせたい。」と、いつも励ましてくれます。アフガニスタンに住む友達は、「平和な国で学校に行けて、勉強できていいね。」と言って毎日泣いています。

日本に来て、辛かったこともありましたが、今は、日本で勉強ができていることが本当に幸せです。日本の国籍を取得し、大学に入って自分の夢を実現させたいと思っています。

家族と話すパシュート語、ウルドゥ話、ヒンディー語、アラビア語、英語、日本語。私が話せる言語です。それを自分の特技として生かしていきたいです。医師になって、母国のアフガニスタンで病気の人達や貧しい人達を助けてあげたいです。私が働くことが、アフガニスタンの女性達の希望につながる。そう信じています。

人間は一人では生きていけません。人から支えてもらい、人を支えて生きています。私を支えてくれた友達や先生、そして両親に恩返しをするために、「一隅を照らす」パシュート語で (يوكونج روشانه كړئ)。まずは、今の自分にできることを、やり続け、やり遂げられる人になりたいです。いつか、日本とアフガニスタンを結ぶ架け橋になるために。

文部科学大臣賞

大切な家族

千葉県 長生村立長生中学校 一年 松原 蒼天

「大事な話がある。」

小学二年生のある日、

「お母さんがすい臓がんになった。」

と、父から聞きました。「がんなんてきつと風邪みたいにすぐ治るだろう。」そのときはそう思っていました。でも、簡単には治らないこと、治すには抗がん剤をたくさん投与しなければならないこと。それがわかったとき、幼かった僕は、不安な気持ちでいっぱいになりました。

長生村に引っ越したあと、病院が少し遠くなりましたが、それでも、一ヵ月に二、三回は病院に通っていました。

やがて、母はあまり歩けなくなりました。僕は母の体調がだんだんと、悪くなっていることに気づいていました。「どうしよう……。お母さん、お母さん……。」母が、自宅で治療をするようになってから、僕には口に出せなかったことがありました。「お母さん、もう少しで死んじゃうのかな……。」

五年生になった二月三日。三時間目。授業を受けていると、いきなり父に呼ばれました。「お母さんの前では、泣くなよ。」

父からそう言われ、僕は、車の中で泣きました。

家に帰ると、母の様子が朝とは違っていました。僕は、母に元気を出してもらおうと一生懸命声をかけました。母はもう何も喋れませんでした。僕は、母の近くで、看護師さんに母との思い出話をしました。思いつくかぎり。たくさん。父と兄が帰ってきたとき、母は、亡くなってしまいました。家族を一人亡くし、僕は、めちゃくちゃ泣きました。十一時十五分でした。

母が亡くなった後、十一時十五分をさした時計が偶然目に入る度に、「お母さん。何もできなくてごめんさい。」と涙があふれそうになりました。また、月命日の三日を迎えると、感謝の気持ちを直接母に伝えたくなくて、悲しくなりました。がんの話を聞いたとき。家族の話を聞いたとき。何度も何度も胸が締めつけられるように苦しくなりました。

中学に入って、クラス全員で作文を書くことになりました。僕は初めて、母のことを書いてみようと思いました。僕は、文章を書くことが苦手でしたが、なぜかスラスラと言葉が出てきました。

作文発表が終わったあと、不思議と心が軽くなったことに気が付きました。これまでフタをしてきた思いを文章にし、気持ちの整理ができたのかもしれない。

「あんなに真面目な蒼天は初めてみた。僕も家族を大事にしようと思おう。」

友達からは、こう言われました。今まで、人からふれられることがなかった話題。当然、自分から口に出すことも避けていました。でも、言葉に表したことで、あのとき自分がどう感じていたのか、何が苦しかったのか、少しだけわかったような気がしました。そしてこの話を聞いて、「家族を大切にしたい。」と思える人が一人でも多く増えるなら、僕が感じた思いをできるだけ多くの人に伝えていきたいと思いました。言葉を使うのは、僕もあまり得意ではありません。しかし、心の中にある思いを「言葉」にすることで、何かが変わるのかもしれないと、今は思っています。

家族との会話。いつもの食卓。何気なく過ぎていく毎日は、皆さんが思っている以上に幸せなことです。今、僕の話最後まで聞いてくださった皆さん。目の前にいる大切な家族とたくさん話をしてください。そして、恥ずかしがらずに感謝の気持ちをつたえてください。伝えられるときに。自分の「言葉」で。当たり前時間が、いつか大切な思い出となるように。

国立青少年教育振興機構理事長賞

ついでにしているだけ

熊本県 熊本市立鹿南中学校 三年 友枝 紗寧

「ついでにしているだけだよ」一年半程前に他界した大好きだった祖父の口癖でした。

私の家の前に古びた駅があります。周りに店が並んでいるわけではなく、普段は人通りの少ない駅です。しかし、通勤・通学の時間になると、高校生や会社勤めの人で駅はにぎやかになります。駐車場や駐輪場も車や自転車がいっぱいです。にぎやかなのはいいのですが、人が増えるとそれにあわせてごみも増えます。祖父は毎日のように散歩のついでに駅に行き、人が捨てたごみを拾っていました。私はそんな祖父に「どうしてごみ拾いをするの」と聞くと、祖父はいつも「ついでにしているだけだよ」と笑顔で答えました。

ある朝、登校途中の道端に食べ終えたガムが捨てられていました。私は「自分が食べたものくらい自分で捨てればいいのに」と嫌悪感を持ちながら学校へ行きました。夕方になり学校から帰ると、スコップを持ち、しゃがんだ祖父が道にこびりついたガムを取っていました。その姿を見た時、私は正直、祖父がそこまでする必要はないと思い、「どうしてそこまでの」と祖父に聞きました。祖父はいつものように「ゴミを拾っていたから、そのついでにしているだけだよ」と答えました。祖父は多くのことを語る人ではありませんでしたが、毎日のように散歩のついでにごみ拾いや地域の清掃をする人でした。まだ幼かった私ですが、そんな祖父が大好きで、カッコよく、その姿を見るたびに心が温かくなっていました。

一年ほど前のある日、母の仕事を手伝うために母の職場に出かけた時のことです。母の職場の近くには神社があり、そこにサイクリングに来た男性がお参りをしていました。男性はお参りを済ませると、近くにあった竹ぼうきを持ち、落ち葉を掃き始めました。その光景を目にした時、私は大好きだった祖父の姿が思い浮かびました。いつからか、ごみ拾いをする祖父を当たり前のように見ていた私は、懐かしさで心が温かくなりました。

このことをきっかけに、私は「ついでに自分にできることはないか」「自分が何かをすることで人の役に立てれば」ということを考えるようになりました。トイレに行く時はついでに自分が使ったスリッパ以外も並べる、自分の机や棚を整理する時は欠席している友達の机や棚も整理するなど、祖父が言っていた「ついでに」ということを心がけて生活しています。「ついでに」ということは、正直面倒くさいと感じてしまうこともあります。しかし、そんな時はカッコいい祖父の姿を思い出すようにしています。

最後の中体連大会を間近に控えた6月、私は柔道の練習中に受け身をうまく取れず、左ひじを痛めてしまいました。病院での診断は全治3か月の大けがでした。もう試合に出られない、仲間たちと柔道をするのではないとわかった瞬間、涙が止まりませんでした。学校で落ち込む私をみんなが励ましてくれたり、荷物を持ってくれたりしました。けがをしてみて、これまでは、私は「ついでに」という気持ちで人のために自分ができていることを考えてきましたが、このけがを通して、私も周りの友達から支えられ、周りの人から「ついでに」いろんなことをしてもらっていることに気づき、してもらうことの嬉しさとありがたさを感じることができました。中体連大会には出ることはできませんでしたが、人のやさしさと思いやりに触れ、その大切さに気づく機会になりました。

祖父は他界し、今では会うこともできません。しかし、私の心の中にはいつも祖父がいます。祖父は「ついでにしているだけ」といつも言っていましたが、その根底にあるものは周りの人や自分が生活している地域への思いやりと優しさでした。自分の行動で周りの人たちが気持ちよく生活でき、生活する地域がきれいになるならば、そのことがうれしいと思っていたのだと思います。私の周りには私にできることがたくさんあります。私も祖父のように自分の行動で人や地域を幸せにできる人になりたいです。「ついでにしているだけ」という気持ちで。

審査委員会委員長賞

障害を乗り越えて

山形県 白鷹町立白鷹中学校 三年 井上 愛奈

「始め」という審判の声は聞こえません。面をつけると、私の世界は静寂に包まれます。相手の立ち上がる動作が、私にとっての試合開始の合図です。

「先天性難聴障害」、私が生まれつき抱える障害です。母が言うには、耳の中にある毛が普通の人より短く、音を聞き取ることができない障害だそうです。人工内耳を使えば、話している音は聞こえるので、小さい頃は不自由を感じることもありませんでした。

私が初めてこの障害を意識したのは、小学生の頃でした。水泳大会の時、先生の鳴らすブザーの音に合わせ、周りの子たちが泳ぎ始める中、私はスタートすることができず、取り残されてしまいました。キョロキョロと周りを見て、数秒遅れてスタートした自分に気付いた時、「耳が聞こえないことは不便なんだ」という思いが頭に浮かんできました。

その日を境に、日常の様々なことが気になって仕方なくなりました。思えば、聞こえていないのに、聞こえているふりをする。それがきっかけで友達とすれ違ったり喧嘩になったりすること。私の中で、当たり前になっていたことだけれど、「普通」はこんなことにならないんじゃないか。どうして自分だけこんな思いをしなければならぬのだろうという思いは、一度湧き上がってくると、もう止めることができませんでした。

剣道に出会ったのはそんな時のことでした。中学校に入学してすぐの部活動紹介で、竹刀を自分の体のように使いこなしながら戦う先輩の姿を見て、「私もこんな風になりたい」と思ったことがきっかけです。

母やお医者様からは、「面をつけると人工内耳を外さないといけない。無音の状態で作るのは危険じゃないか。」と心配されましたが、「それでもやってみたい」「今のこの気持ちを大切にしたい」という私の思いを尊重してくれました。

剣道を始めてしばらくは、苦勞の連続でした。聞こえないことで、監督の細かい指示が分からず、その場で止まってしまうことが、わかってはいたけれど、苦しかったです。

しかし、そんな時はいつも部活の仲間たちが身振り手振りで次にやることを示してくれたり、休憩時間に監督の言ったことを教えてくれたりしました。監督やコーチも、紙やスマホにアドバイスを示してくれるなど、私のために工夫をしてくれました。耳が聞こえないからといって、変に気を遣わず、他の仲間と同じように厳しい言葉、前向きな言葉をかけてくれました。手話とも違う、剣道部の中だけで伝わるジェスチャーがとても心地良かったです。私も、わからないことは受け身にならず、唇を見たり、人工内耳を付けてから聞きにいたりして、私の方から積極的な姿勢を持つように変わっていきました。

中学校最後の大会。個人戦決勝。私の竹刀が、相手の胴を捉えました。審判の声は聞こえません。それでも、狭い視界の端で見える応援してくれている仲間たちの、嬉しそうな表情や飛び上がるような動作が、私の一本を物語っていました。そう、聞こえなくても、伝わっています。あの時、勇気を出して剣道に挑戦してよかった。心からそう思いました。

「ないものはない。あるものはある。今自分が持っているものを大切に。」指導者の方が教えてくれた言葉です。今、私が持っているものは、障害があっても、それを乗り越え、挑戦する勇気です。

勇気を出して挑戦すれば、必ず自分を応援してくれる人、支えてくれる人がいます。そういう人たちの気持ちに応え、報いることが私にできることです。だから、これからも多くのことに挑戦します。私にとって、挑戦することは、感謝を示すことだから。

審査委員会委員長賞

「じゃない方」になって気づいたこと

愛知県 西尾市立鶴城中学校 三年 村木 新

「新のお弁当、美味しそうだね」

部活動の試合や校外学習などがあると、弁当が必要になる。食事中、弁当をのぞいてきた友達にそう言われることが度々あった。その時、私は父の顔を思い浮かべ、少し誇らしい気持ちになり、感謝する。

父は弁当が必要だとわかると、数日前から

「おかずはどうしたらいいんだ」

と、頭を悩ませているが、当日になるといつも早起きして美味しい弁当を作ってくれる。皆さんは、弁当を作ってくれるお父さんと聞くと、どんなイメージを抱くだろう。

「男性なのに、料理ができてすごいな」

もしくは、

「なんでお母さんが作らないの」

と疑問に思う人もいるだろう。その疑問が湧くのは、きっと父親には「仕事をしてお金を稼ぐ一家の大黒柱」とか、「家事は母親が中心で父親はあまり手を出さない」などのイメージがあるからだろう。私の父も、以前はそんな「世間一般の父親像」とそう違いはなく、はじめから料理をしていたわけではなかった。では、なぜ料理をするようになったのか。それは、必要に迫られたからだ。

私が小学六年生になってすぐの四月、母は病気で天国へと旅立った。残された家族で生きていくために、父は仕事と家事をこなし、私たち兄弟三人を育てている。いわゆる「シングルファザー」の一人だ。母の一件から、私たちは、世間にありふれたごく普通の家族から、普通「じゃない方」の家族へと、オセロがひっくり返るように一変したのだった。

世間一般で見れば、ひとり親世帯が少数派で、その中でも父子家庭は母子家庭より圧倒的に少ない。ひとり親になる理由は、離婚や死別などさまざま。それにもかかわらず母子家庭が多いのは、おそらく子育てをする上で母親の方がもともと関わりが深く、家事をしていたという理由からだろう。

日頃、私は家族を支える父の姿を見ている。そんな父に改めてシングルファザーでどんなことに困っているかを聞いてみると、

「ひとり親世帯に対する支援は、就労や所得に制限がある手当などに限られている。実際は経済面以外にも、家事や仕事の子どもの世話、習い事の送迎など、助けを借りたいことはたくさんあるのに、そういった支援は少ないな」

と話してくれた。こうした背景には、同じひとり親でも、男性は女性と比べ経済的な変化が少なく、それほど困っていないと思われる点があるからかもしれない。

私も、自分が今の状況になって、初めて父子家庭について考えるようになった。もし家庭環境に何も変化が起きなかったのであれば、父子家庭について何も考えることはなく、不自由のない毎日を過ごしていたと思う。では今後、自分が当事者であるかにかかわらず、さまざまな社会問題に対し、どのように目を向けていけばよいのだろう。当事者ではないからと言って無関心でいたなら少数派にいる人々の思いは日の目を見ることなく、消えていってしまうだろう。自分の生きていく社会をそんな社会にしないため、二つのことを心がけたい。

一つ目は、無意識のうちに世間の常識と思い込んでいる見方や、多数派の意見を一方的に押し付けることのないようにすることだ。そのような「アンコンシャスバイアス」と言われる意識が、性別や年齢、家庭や社会での役割に働いている場面があるかもしれない。できる限り先入観をもたず、実態に目を向け相手の立場に立ってものごとを考えることができる想像力を養っていきたい。

二つ目は、たとえ自分が「じゃない方」の少数派になることがあっても、自分の意見を言うべき時にしっかりとと言える、勇気をもった人間になりたいということだ。

このように、社会のさまざまな事象や立場に関心をもち、適切に自分の考えを主張していくことが、社会全体をよりよい方向へと変えていく力になると、私は信じている。

私は今日も父が献立を考え、父が作った料理を食べる。今はまだこれは一般的「じゃない方」と思われるかもしれない。しかしいつか、そうした少数派の立場の人たちも、少数派「じゃない方」の人たちも誰もが、住みやすい社会が来ることを願っている。

第46回少年の主張全国大会～わたしの主張2024～

開催要綱

1. 趣 旨 少子高齢化、国際化、情報化が急速に進み、環境が目まぐるしく変化する現代社会において、次代を担う子どもたちには、心身ともに健康で他者を思いやる心を持ち、社会的に自立していける、健やかな成長が求められています。そのためには、広い視野と柔軟な発想や創造性などと共に、物事を論理的に考える力や、自らの主張を正しく伝え、理解してもらう力などを身に付けることが大切です。少年の主張全国大会は、子どもたちにとってこれらの契機となることを願い実施するものです。
2. 開催日時 令和6年11月24日（日）13時～16時
3. 開催場所 国立オリンピック記念青少年総合センター カルチャー棟大ホール〒151-0052 東京都渋谷区代々木神園町3番1号
4. 対 象 日本在住の中学生及びそれに相応する学籍又は年齢にある者。
※国籍は問わないが日本語で発表できること。作品は未発表・自作のものに限る。
5. 主 催 国立青少年教育振興機構
6. 協 力 都道府県、青少年育成都道府県民会議、全国青少年育成県民会議連合会、全日本中学校長会、日本私立中学高等学校連合会、公益社団法人日本PTA全国協議会
7. 後 援 内閣府、文部科学省、東京都教育委員会、NHK、一般社団法人日本民間放送連盟、一般社団法人日本新聞協会、社会福祉法人全国社会福祉協議会
8. 主張発表者（出場者）・発表内容
 - （1）主張発表者 各都道府県より推薦された地方大会（都道府県大会）優秀者1名、計47名の中から、審査委員会においてブロック代表として選出された12名が主張発表を行います。
 - （2）ブロック代表定数 全国を5ブロックに分け、ブロック毎の定められた出場者数を定め、それぞれの人数のブロック代表者を選出します。
○北海道・東北ブロック：2名 ○関東・甲信越静岡ブロック：3名
○中部・近畿ブロック：3名 ○中国・四国ブロック：2名
○九州ブロック：2名
 - （3）発表内容 ア. 社会や世界に向けての意見、未来への希望や提案など。
イ. 家庭、学校生活、社会（地域活動）及び身の回りや友達との関わりなど。
ウ. テレビや新聞などで報道されている少年の問題行動、大人や社会の様々な出来事に対する意見や感想、提言など。
 - （4）発表時間 5分程度（400字詰原稿用紙4枚程度）
9. 表 彰
 - （1）全国大会出場者全員（12名）に国立青少年教育振興機構理事長より奨励賞、全国大会出場者に選考されなかった都道府県代表者全員（35名）に同理事長より努力賞を贈ります。
 - （2）全国大会の審査委員会で審査の上、内閣総理大臣賞・文部科学大臣賞・国立青少年教育振興機構理事長賞を選考し、賞状を授与します。また、審査委員会の審査過程によっては、審査委員会委員長賞が選考される場合があります。
 - （3）全国大会出場者全員（12名）に、記念品が贈呈されます。また、内閣総理大臣賞・文部科学大臣賞・国立青少年教育振興機構理事長賞・審査委員会委員長賞を受賞された方には、副賞が贈呈されます。

～育てよう 未来を見つめる かがやく瞳～



青少年育成青森県民会議

〒030-8570

青森市長島1-1-1 青森県県民活躍推進課内

TEL : 017-734-9224

FAX : 017-734-8050

E-mail : katsuyaku@pref.aomori.lg.jp